

CL季刊誌講読所感

C. S.



●「CLを読み返す」●

CLの本や季刊誌を読み返すとき『エッ！こういうことが書いてあったの?!』と驚くことがよくあります。これほど有益な内容を読ませて頂いたのに全く覚えていないなんて、私はなんて感謝知らずで薄情なのだろうと自己嫌悪に陥ってました。

著者の方も「初めて本の中身を読んだかのように思えるときがあります」と書いていらっしやっただけで安心致しました。

●CL寓話「スノーボール」●

ジェリーの可愛い兎が犬に襲われ死んでしまう悲しい寓話でした。

『あなただったらジェリーに何と言うでしょうか』との問い掛けを考えてみましたが『人生とはそういうものよ』に類した冷たい言い方しか思い浮かびませんでした。

私も11歳の時に似た経験があることを思い出しました。飼っていたコリー犬が仔犬を産みました。ねずみ程の大きさの仔犬たちを私の膝の上に重ねて眠らせて子育てを手伝ったりもしました。一番可愛い雌の仔犬はウチに残すことになりました。仔犬は可愛いらしく、毎日が楽しいばかりでした。

ある日、下校すると仔犬は交通事故で冷たくなっていました。人生で初めての愛する存在の死でした。悲しくて、悲しくて誰になんと言って慰めて貰ったか一切覚えていません。

ジェリーのように強い悲しみの只中にいる時は、慰められても記憶に残す余裕は無いかもしれませんね。そのような時は、言葉を見つけられなくても、親しい仲間ら手を握って近くにいてあげたいです。

「わからないわ」というジェリーの母親の言葉がふさわしいですね。悲しい出来事に対して、根拠のない楽観的な思いつきを話すなら親として無責任になってしまうのでは。

兎を襲った犬に対し「同じように何かに殺されたらいい」と怒りをぶつけたジェリーを咎めないで、母親はジェリーが兎の世話を上手にしていたことを褒めました。冷静な振る舞いを見倣いたいです。

「きっと兎は、私達と一緒に住んでいた間、とても幸せだったに違いないわ」という母親の言葉は効果があると思います。50代の私が3頭目に飼った犬を送る時に「きっと幸せだったと思います」との友人からのメールはとてもエネルギーを頂けるものでしたから。

記事の中には「人生で悪い結果になったら自分に何と言いますか」との問い掛けもありました。

100%良いことも、100%悪いことも無いのでは？今の私が気付いていないだけで、この先振り返って見たときに『あのことのお陰で、今静かに暮らせている』と感謝するかもしれないと励ましましょうか。

悪いことは直ぐに過去の出来事になり、過去は様々な角度から見て『良かった』と解釈できるのでは。

●「ウォーキングから散歩に」●

春から散歩に出ていますが、私の歩みは遅く皆さん私を追い越して行かれます。これが私の速度と

いう事実を受け入れるだけです。走ってみたり、早歩きして無理をするなら続かないし、怪我をしそうです。

人生を歩むスピードも各々違います。自分の速度で歩むだけと納得しています。

●「CLとアジアの格言」●

記事にも書いてあった「とりとめのない自己中心のおしゃべり」は苦手です。

「書くことも内容に注目すべきです。他の人の目と時間を書いたもので盗まないように」そうですね。自己中心のおしゃべりを書かない内容に、簡潔にまとめなくては。(岩手県盛岡市)



[目次へ戻る](#)